紙上展示室 ―旭モノ語り― 第十七回

穴澤松五郎木像

冬のおやつの一つが、干しいも（乾燥いも）、郷土の懐かしい味覚でもあります。千葉県は茨城や鹿児島と並ぶ甘藷（さつまいも）の三大生産地として知られています。江戸中期、幕府の命を受けた青木昆陽が、飢饉対策の作物として全国に広めたことはよく知られていますが、旭市にも、「昭和の青木昆陽」とうたわれた、おいもの先生がいました。それが穴澤松五郎（一八七七～一九四五）です。明治十三年、鶴巻村見広（旭市見広）に農家の次男として生まれましたが、兄の死去でわずか十歳で跡取りとなった松五郎は、当時、近隣地区で栽培が盛んに行われていた甘藷の研究を熱心に行いました。特に育苗法に興味を持ち、苗床に幌をかけることによって保温効果を高める「幌式穴澤式甘藷育苗仕立て法」を発明しました。

大正十年には海上郡甘藷苗出荷組合連合会を結成するなど、効率的な農業や流通にも目を向け、当時約二千人がその教えを受けていたといわれています。その後、でんぷん工場の設立などにも尽力しました。昭和に入ると各地へさつまいもの栽培指導に出向くなど、活動規模は全国に広がり、昭和十五年から十九年には中国でも指導を行っています。昭和二十年、六十四歳の生涯を閉じるまで、戦時下の食糧難時代に甘藷の普及に努めました。

この木像は、松五郎の緑綬褒章の授与を記念して、門弟たちによってつくられたものです。日本彫刻界の巨匠、円鍔勝三（一九〇五～二〇〇三）による無彩色の木像作品で、松五郎が生前よく着ていた国民服姿がモデルとなっています。戦前、緑綬褒章は実業に精励した人物に贈られました。胸にはしっかりとその褒章が刻みこまれています。

〔大原幽学記念館　猪野映里子〕